



新堂冬樹

Shindo Fuyuki

溝鼠

ドブネズミ

徳間書店

溝 鼠

ドブネズミ

新堂冬樹

Shindo Fuyuki

徳間書店

二〇〇二年四月三〇日 第一刷

著 者 新堂冬樹

発 行 者 松下武義

発 行 所 徳間書店

東京都港区東新橋一―一六

郵便番号一〇五―八〇五五

電話〇三―三五七三―〇一―二(代表)

振替〇〇―一四〇―〇一四四三九二

本文印刷・図書印刷株式会社

カバー印刷・真生印刷株式会社

製本所・大口製本印刷株式会社

© Fuyuki Shindo, 2002 Printed in Japan
編集担当 本間 肇

落丁・乱丁はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります

溝 鼠・ドブネズミ

Dobunezumi | Fuyuki Shindo

新堂冬樹

1966年大阪生まれ。金融会社勤務を経て、現在は都内各所でコンサルタント業を営む傍ら執筆活動をしている。
『血塗られた神話』(講談社)で第7回メフィスト賞を受賞して作家デビュー。
以後『闇の貴族』(みくでなし)『講談社』『無間地獄』(幻冬舎)『カリスマ』(徳間書店)『鬼子』(幻冬舎)を刊行。
『カリスマ』はその内容のあまりの迫力に大変なベストセラーになる。
本書はその『カリスマ』のパワーが復讐代行屋という特殊な世界で炸裂した傑作。出版界初のR指定である。

ISBN4-19-861501-2

溝

鼠

ドブネズミ

装帧・多田和博

カバー写真・株式会社スタジオライズ
小林伸一郎

1

カーキ色のＴシャツが、不快に背中に貼りついた。額に、鼻の頭に、首筋に、噴き出す汗——エアコンが壊れたハイエースの車内は、サウナのようにうだつていた。

サイドシートに身を預けた鷹場たかばは、フロントウインドウ越しに瀟洒しょうしゃな煉瓦造りのマンションのエントランス付近を凝視していた。

マンション——アミューズ西麻布。

薄闇に包まれ熟睡する森閑とした住宅街には、ゴミ袋に顔を突っ込む野良猫以外に、人の気配はなかった。野良猫と自分ジブネズミ——嵌はまりすぎるシチュエーション。ドブネズミ。自分を知る者がつけた卑称。陰でそう

呼ばれていることを、自分は知っている。否定はしない。腹立たしさもない。過去にやってきたこと、いまからやろうとしていることを考えると、これ以上の的を射ている呼称はない。

ドブネズミ。卑いやしく、小狡こずく、みすばらしい嫌われもの。

が、鷹場は知っている。人間様が滅びても生き延びると言われる、ドブネズミの逞たくましい生命力を。

他人ひとから、認められたいとは思わない。ましてや、尊敬されたいなどとは思わない。

自分の望み——誰よりも金を持ち、誰よりも生き延びること。

そう。餌かえを手に入れるためなら、軽蔑されることなど屁でもない。たとえその餌かえが他人ひとのものであろうと、腐っていようと構わない。

金に、きれいも汚いもない。聖者が持っても一万円。犯罪者が持っても一万円。金は、人を差別したりはしない。金は、人を選んだりはしない。手に入れた者のために、従順に仕える僕しもべ——金は、人を裏切ったりはしない。

鷹場は、額と首筋に滲む汗を掬った掌を、ベージュのチノパンに擦りつけた。色褪せ、ところどころに黒いシミが付着したチノパン。くすんだカーキ色のＴシャツと相俟って、みすばらしさに拍車がかかった出立ち——自分に相應しい出立ち。

仕事で必要に迫られないかぎり、自分の夏の定番のスタイル。みすばらしかろうが見栄えが悪かろうが、死にはしない。自分の興味は、餌を蓄えることだけだ。社員のブーイングを聞き流して、車のエアコンを修理しないのも同じ理由だ。

鷹場はカメラに火をつけ、新宿駅前の露天商から九百八十円で買った、安っぽい金メッキ張りの腕時計に眼をやった。秒を刻むことさえできれば、ロレックスである必要はない。

午前四時三分。腕時計の文字盤から、フロントウインドウに視線を戻した。空は、白み始めていた。

「女は、昨日、何時に戻ってきたんだっけ？」

鷹場は、アミューズ西麻布前の路上に投げていた視線を隣席——ドライバーズシートに座る、グレイのシングルスーツ姿の八木昭雄に移して訊ねた。

「たしか、四時半頃だったと思います」

八木が、抑揚のない口調で言った。

一系乱れぬ七三分けの髪、インクの切れたマジックで擦ったような薄い眉、銀縁眼鏡の奥の、糸のように細い眼、黒紫色をした薄い唇——八木は、鷹場より二十歳上の四十七歳だ。

鷹場の経営する幸福企画に入社する以前の八木は、三軒茶屋の公立中学で数学の教師をしていた。

八木と出会ったのは三年前、幸福企画を立ち上げる以前に鷹場が勤めていた渋谷のキャバクラ、ミントガールでだった。

八木は、出入り禁止寸前の要注意人物だった。八木が凶暴というわけでも酒癖が悪いというわけでもなかった。むしろ、物静かにグラスを傾ける八木は、酔いに任せて女の胸や尻を触ろうとする客が多い中で人畜無害な部類だった。

八木が、ミントガールに連日のように通い始めて一週間がすぎた頃、鷹場は、彼の物静かな仮面の下に隠された素顔を知った。

——店長。あのストーカー男をなんとかしてください

い。もう、気持ち悪くって……。

——どうした？ レオナ。あの男って、誰だ？

——八木さんです。どこで調べたのか、私のマンションの前で待ち伏せしてて、夜明けのコーヒーと一緒に飲みたいとか、僕のすべてを知ってほしいから、いまから家でアルバムをみようとか……。あの男、絶対に変態ですっ。

ミントガールで指名数ナンバー1を誇るレオナと店長の話を目にした鷹場の聴覚が、敏感に反応した。

当時の鷹場は、自分の特性を活かしたある商売を考えていた。事務所と携帯さえあればすぐにでも開業できる、ある商売を始めることができるくらいの小金は貯めていた。だが、金はあっても、人手がなかった。

鷹場の考えていた商売は、その特殊な業務柄、募集広告で社員を募るといふわけにはいかない。自分と同じような特性を持った者でなければ、務まらない仕事だ。

レオナからストーカー行為を聞かされた店長は、翌日、開店と同時に店に現れた八木に、女のコにつき纏われないでほしい。ストーカー行為を即刻やめなければ、

出入り禁止にする、と警告した。

八木は、屈辱に唇を震わせながら、わかりました、と押し殺した声で、レオナにつき纏わないことを約束した。

翌日から、八木は店に現れなくなった。レオナへのストーカー行為もピタリとやんだ。が、代わりに、日に百回を超える無言電話が店にかかってくるようになった。

店長は、八木を疑った。鷹場も、同感だった。が、陰湿かつ執念深い行為を、八木だと証明できる証拠がなかった。

鷹場は、ある絵図を描いた。

ある絵図——八木の勤めている学校に、ふたりのヤクザふうの男達を乗り込ませた。

——てめえっ、レオナに手を出しやがってっ。おおっ!? どうカタをつけるつもりだっ! 先生よおっ!!

——しかもっ、いやがるネエさんを縛って、ニンジンや大根を突っ込んだそうじゃねえかっ! ニンジンはまだしも、大根はねえだろっ! このっ、変態野郎がっ!

授業中のクラスへ、職員室へ、ふたりのヤクザふうの男達は連日に亘って乗り込み、怒声と罵声を撒き散らした。

八木がレオナにつき纏ったのは事実だが、ふたりの男達が言うように、手を出したりはしていない。

だが、真実など、どうだってよかった。重要なのは、八木を針の筈状態にすることにあった。

鷹場の目論見どおり、教員や生徒の白い目に耐え切れず、八木は、ふたりの男達が乗り込んで四日目に学校に辞表を出した。

ふたりのヤクザふうの男達——ミントガールに、ちよくちよく顔を出していた寿司屋の板前。

鷹場はふたりに、福沢諭吉を五枚ずつ掴ませ、女にちよっかいを出された兄貴分と、兄貴分につき添う舎弟の役を依頼した。

鷹場が絵図を描いた目的——もちろん、店の代わり

に仇を討ったわけではない。
鷹場が絵図を描いた目的——常軌を逸した偏執狂が、執念深く陰湿な八木が、どうしても必要だった。

職を失い、ミントガールにたいして復讐の鬼と化し

た八木に、鷹場は接触を図った。

店の女に手を出し、自分も店長にクビにされた。なんとか、一泡吹かせたい——案の定八木は、鷹場のでたらめ話に乗った。

自分と八木は、店長自慢のボルシェ・911・カラを丸焼きにした。鷹場に、店長にたいしての恨みはなにもなかったが、八木を手に入れるためには仕方がなかった。

記念すべき幸福企画初の仕事の報酬は、八木を獲得できたことだった。もちろん八木はいまでも、路頭に迷っていた己に手を差し延べ、しかも鬱憤を晴らしてくれた救世主が、同志獲得のために己から教職の立場を奪った張本人だとは、夢にも思っていない。

「きましたよ」

八木の囁きで、鷹場は記憶の旅を中断した。

フロントウインドウ越し——約三メートル先から早足で歩いてくる、二十代前半の女。ボディラインがくっきりと浮かび上がる、ヴェルサーチかなにかの派手な柄のワンピースに、肩から提げた小ぶりのショルダーバッグ。服は違うが、昨日確認した女と同一人物。

一介のデート嬢にはみえないモデル張りのスタイルに、思わず見惚れてしまう美貌。

念のため、鷹場はダッシュボードから写真を取り出した。

シートで胸もとを隠し、ベッドに腰かけ営業スマイルを浮かべる女。透けるように白い肌を覆う、薄茶に染めたロングヘア。ずっと切れ上がった目尻、欧米人並みの高い鼻梁、口角の吊り上がった薄く形のよい唇……。

写真の中の女——眼前の女。藤木安菜に、間違いな

い。

「八木さん、出して」
眼の周囲だけ楕円形に開いたフェイスマスクを被り、革手袋を嵌めた鷹場は、低く短く命じた。自分同様にフェイスマスクと革手袋をつけた八木が、ゆっくりとハイエースを発進させた。ナンバープレートにガムテープが貼ってあるのは、言うまでもない。

鷹場はサイドシートを跨ぎ越え、ミドルシートの右の座席に移った。正面向かって右側を歩く藤木安菜が、ヘッドライトの帯の中で、眩しそうな顔で立ち尽くし

た。

ミドルウィンドウが藤木安菜を捉えた位置で、スロ―ダウンするハイエース。スライドドアを引いた。フェイスマスクを被った自分を眼にした藤木安菜の切れ上がった目尻が、大きく裂けた。車外に半身を乗り出した鷹場は、彼女の華奢な胴に右腕を回し、引き寄せ、左手で唇を塞いだ。

鷹場は、藤木安菜を抱きかかえたままシートに背中から倒れ込み、足でスライドドアを閉めた。スピードアップしたハイエースは、右折左折を繰り返した。

目的地——アミューズ西麻布から数百メートルの位置に、児童公園があるのは下調べ済みだ。

尻がバウンドした。ハイエースが、人気のない児童公園に乗り込んだ——停車した。くぐもった悲鳴を上げ自分の腕の中で暴れる藤木安菜の鼻先に、八木がスタンガンを突きつけた。

「暴れたり大声を出したら、大事な顔がケロイドになっちゃいますよ。ふふ……。彼が手を離しても、騒がないって、約束できます?」

うわずった声、不気味に吊り上がった口角、潤んだ

瞳——八木は、興奮していた。

蒼白な顔で頷く、藤木安菜の大きく見開かれた眼から零れ落ちた涙が、ファンデーションに轍を残した。

鷹場は、唇を塞いでいた左手だけをゆっくりと離れた。

「あなた達……誰——」

素早い動きでミドルシートに移った八木が、藤木安菜の唇をガムテープで塞いだ。続いて、ミリタリーショップで購入したふたつの手錠で、手際よく手足を拘束した。

本当に、こういうときの八木は、サバンナを疾走するオジロヌーのように生き生きとしていた。

鷹場は、スポーツバッグから鋏、バリカン、剃刀、シェイビングクリームを取り出し、シートに放った。

自分と八木に挟まれる格好で恐怖に凍てつく藤木安菜が、激しく身を振った。

青白い閃光が視界を焼き、バチバチッ、という乾いた音が鼓膜を震わせた。

「騒いだらケロイドになるって、言っただけでしょう？」
スタンガンを放電させながら、八木が法悦の声で言

った。藤木安菜が、硬直した。

鷹場は、銅像と化した藤木安菜のサラサラの髪に鋏を入れた。前腕に伝うジョリジョリという感触、涙に濡れた長い睫毛を震わせ、恐怖と屈辱に耐える藤木安菜

沸騰した血液が、下半身に雪崩れ込んだ——勃起した。

鷹場は、鋏をシートに放り捨て、オペ中の執刀医のように右手を八木に差し出した。八木から受け取ったバリカン——スイッチを入れた。

車内の空気を陰気に震わせるモータ音。藤木安菜の軀も震えていた。トラ刈りになった彼女の頭を、バリカンで一厘刈りに「整地」した。鷹場と藤木安菜の太腿の上を、切り落とされた茶髪が埋めた。

「剃刀とシェイビングクリーム」

バリカンを放り投げた鷹場は、ふたたび、右手を八木に差し出した。藤木安菜のくぐもった悲鳴と、八木の興奮した息遣いが交錯した。藤木安菜の、絶望と懇願の混濁した瞳が自分をみつめた——ペニスの硬度が増した。

鷹場は、藤木安菜の形のいいアーチ眉にシェイビングクリームをたっぷり塗った。左手の親指で額の皮

膚を伸ばし、剃刀の刃を右の眉にあてがい、上から下に滑らせた。また、くぐもった悲鳴。三度、同じ動作を繰り返して左眉に移った——左眉も、同様に剃り落とした

一厘刈りの頭に眉なしフェイス——藤木安菜のモデル顔負けの美貌は、三十年前の田舎ヤクザさながらの極悪フェイスに早変わりした。

鷹場は、眉を剃り落とした剃刀を、藤木安菜の頬に軽くあてた——引いた。

新雪のような白い肌に、鮮血が滲んだ。目尻を裂いた藤木安菜が、狂ったように一厘刈りの頭を左右に振り、眉のない眉間に苦悶の縦皺を刻み、激しく身を振った。鷹場の脳内で、アドレナリンの蛇口が全開になった。

坊主刈りの落、眉毛のない落、壊れた美貌を歪めて狂乱する落——頭蓋内で弾ける金属音、全身を埋め尽くす鳥肌、チノパンを突き破らんばかりにそそり勃つペニス。

落の右頬、左頬、顎、額、鼻尖に、滅多無尽に剃刀を走らせた。幾筋もの亀裂が入った落の顔が、まっ赤

に染まった。鷹場の視界も、まっ赤に染まった。

赤い視界に、閃光が明滅した。剃刀を持つ腕の動きを止めた。顔を上げた。インスタントカメラのシャッターを切る八木。八木のスラックスの股間も、テントを張っていた。

「ほおおーらあー、ほおおーらあー、ほおおーらあー、その坊主頭を、眉のないズタズタに切り刻まれた顔を、写してあげるからねえー。笑ってえー、にっこりと、笑ってえー」

サディスティックな八木の声で、鷹場は我を取り戻した。視線を落、いや、藤木安菜に戻した。藤木安菜は、気を失っていた。捲れ上ったワンピースの裾から覗く太腿が、濡れていた。

鼻孔に広がるアンモニア臭——藤木安菜は、失禁していた。

「ねええー、やっちゃいましようよおー、ねええー、社長お？」

八木が、フェイスマスクをずり上げ、藤木安菜の尿で濡れそぼる太腿を舐め回しながら、恍惚とした声で言った。

鷹場は八木を無視して、藤木安菜の手足を拘束していた手錠を解錠し、唇を塞ぐガムテープを剥がした。

スライドドアを開けた——失神し、マネキン状態の藤木安菜を車外へと蹴り落とし、ドアを閉めた。

フェイスマスクを外した八木は、不服そうな顔で乱れた七三髪を撫でつけていた。

「八木さん、そう膨れんなよ。女を犯してくれ、という依頼は受けてねえんだから。ビジネスに、公私混同は禁物ってやつだよ。さあ、人にみられないうちに、はやいところを出してくれ」

そう、これはビジネスだ。屈折した、己の欲望を満たすのが目的ではない。

ビジネス——復讐代行屋。目的——藤木安菜に、最大の屈辱と底無しの絶望を与えること。

彼女は、きっと、犯されるだけのほうが十倍もましかったことだろう。

渋々と八木は頷き、ドライバースシートへと移動した。八木のテントを張った股間が濡れていたのを、鷹場は見逃さなかった。

変態の、カス野郎がっ。

八木に、心で罵声を浴びせた——自分へ浴びせた罵声でもあった。

耳障りな声。薄目を開けた。パイプベッドの上。足もとで首を振る扇風機が、生温い空気を掻き回している。切れかかった蛍光灯が陰気に明滅する、薄暗くじめじめとした室内。

歌舞伎町の区役所通り沿いに建つ、雑居ビル五階に事務所を構える幸福企画の十二坪のフロアをパーティションで二分して作った鷹場の寝ぐら——熟睡してしまつたようだ。

上半身を起こした。ヒス女のコ切り声のように軋むパイプベッド。ベッドの下に置きっ放しのカップ麺の汁で溺死するチャバネゴキブリ。鷹場は、両腕を突き上げ、伸びをした。

事務所と寝ぐらを兼用した、築二十五年のおんぼろビル。温風を撒き散らすだけの扇風機も、塗装が剥げて錆の浮いたパイプベッドも、ベッドの枕もとにあるテレビも、すべて、粗大ゴミ出身だ。

寝ぐらは雨風が凄げれば、ベッドは横たわることが

できれば、それでいい。クーラーは、社員が働く隣室の事務所で十分だ。

花より団子、色気より食い気、詩を作るより田を作れ——自分の性格を表現する諺。

究極の拝金主義、金の亡者、守銭奴——いままでに、数かぎりなく叩かれただろう陰口。

気にはしない。最終的には、金が物を言うことを鷹場は知っている。金があれば、あのくそ野郎の尻拭いで、濡と離れ離れになることはなかった……。

眼を閉じた。忌まわしい過去。くそ野郎の、こすっからくサディスティックな顔が瞼の裏に浮かんた——腸が、煮えくり返った。濡の、目が眩むような美しい顔が浮かんた——内臓が、溶け出してしまいうたた。

物凄いスピードで溯ろうとする記憶を止めた。眼を開けた。相変わらず、朦朧とした意識に絡みつく耳障りな声。ベッドから下り、トイレへと向かった。ドアを開けた。耳障りな声の主——携帯を耳にあて、便座に座った八木。

「ねえ、パンティは何色なの？ フリルつきの白か

な？ それとも黒いTバック？ どっちでもいいからさ、パンティを脱いで、おまんこ広げてみせてよお。はぁっ……はっ、はっ、はっ……」

送話口に、卑猥な言葉と喘ぎ声を吹き込む八木。

腕時計をみた。午前七時四十分。藤木安菜の「仕事」が終わったあと、八木と事務所に戻ってきたのが午前五時半。鷹場はカップ麺を胃袋にぶち込み、自室のベッドに横たわり仮眠を取った。八木にも隣室の応接ソファで仮眠を取ることを勧めたが、「仕事」が残っていると、己のデスクで電話をかけた始末。

八木の電話の相手——十四歳の女子中学生。八木の名誉のために言っておけば、本人が言うとおりに、趣味を兼ねてはいるが、この変質的な電話は立派な「仕事」だ。

事務所だけでなく鷹場の部屋で電話をかけているのは、恐らく、沙耶か中丸が出社して「仕事」を始めているからだろうし、トイレに携帯を持ち込んでいるのは、仮眠を取っている自分を気遣ったことだろう。

幸福企画の常勤社員は、鷹場を含めて四人いる。社員といっても、仕事の仕事なだけに、出社時間や勤務

時間はまちまちだ。対象者が真夜中にしか捕まらないのなら、社員も真夜中に出社する。

そして、対象者への「仕事」が終わったら、鷹場が次の「仕事」の指示を出すまで、自宅へ帰って寝るなり酒を飲みに行くなりは社員の自由だ。

が、鷹場は社員達に、どこにいるときでも、なにをやっているときでも、常に携帯の電源をオープンにすること、自分が指示を出したらばすぐに、「仕事」に取りかかることを義務づけていた。

たとえ泥のように眠っているときでも、女の上で腰を振っているときでも、それは例外ではない。

社員達には、携帯が繋がらなかったり、「仕事」に穴を開けたら、一万円の罰金を課していた。だが、過去に、「仕事」に穴を開けた社員はいない。

幸福企画の社員は、みな、復讐代行という「仕事」をこよなく愛している。同様に、金を愛している。鷹場が尻を叩かなくとも、三度の飯より好きな「仕事」をすっぱかし、命の次に大事な金を取られるような愚か者はいない。

「おじさんのちんぽはね、ぶっとくて、カリ首が張っ

てるんだよ。美樹ちゃんがつき合っている高校生の包茎ちんぽなんかとは、比べ物にならないんだからあ。」やっぱり美樹ちゃんも、彼のものしゃぶったりするのかな？ まさか中学生なのに、タマを舐め上げたりはしてないよね？。「はっ……はっ……あうん。いま、おじさんがなにやってるかわかるかい？ 美樹ちゃんのルーズソックスの匂いを想像して、ぶっといちんぽを抜いているのさ」。

便座に座り、猫背気味に背中を丸めて携帯を握り締めた八木は、終了ボタンとりダイヤルボタンを交互に押しながら、卑猥な言葉と不気味な喘ぎ声を送話口に吹き込み続けている。

八木の「仕事」。二日前に、五十一歳の区役所の職員から受けた依頼。

——半年間、想い続けたのに、美樹には十六歳の彼氏がいた。赦せない。徹底的に、美樹をこらしめてほしい。美樹を尾けた際に父親の名前を確認し、知り合いのN.T.T.の職員に電話番号を調べさせた。美樹は父子家庭で育ったひとりっ子で、七時をすぎれば父親は出社して、彼女が登校する七時半までは本人しかいな

い。方法は任せるが、とにかく美樹を懲らしめてほしい。

通勤電車で、美樹なる少女を見初めたロリコン中年男の依頼に、八木は昨日だけで百回以上のいやがらせ電話を入れている。今日も、五時半からかけ続けているとしたら、既に二時間を超えている。むろん、依頼人に聞かせるために電話の内容を録音しているのも、電話代を依頼人に請求するのも言うまでもない。

糸のように細い臉の奥の眼を充血させた八木は、彼女が学校に行つて不在だろうにも拘らず、留守番電話になっているだろうにも拘らず、サディスティックに口もとを歪め、スラックスの股間を膨らませ、「仕事」に励んでいた。

己の趣味で金が稼げるのだから、八木にとって幸福企画は、その社名どおり、至福の樂園に違いない。

下種男の依頼を嬉々として実行する下種男——その下種から報酬をもらい、下種に給料を払う自分は、誰よりも下種な人間だ。

込み上げる自嘲を呑み下だし、鷹場は踵を返した。隣室——事務所へと向かった。

「仕事なんてえ、すっぱかしてよお。薫より、取り引き先の人が大事なのお？ だったらあ、ねえ、お願い……。今日は私の誕生日だからあ、一番好きな人と過ごしたいの。ねえ、お願い」

二脚ずつ向かい合った四脚のスチールデスクの右手前の席に座った沙耶が、携帯を肩と頬に挟み、マニキュアを指に塗りながらプードルさながらの鼻声を撒き散らしていた。

薫——偽名。沙耶の電話の相手は、印刷屋経営のヒヒおやじ。電話の向こう側でやに下がっているだろうヒヒおやじ——島根の顔が、眼に浮かぶ。

四日前。島根の女房からの依頼——「いい加減、あの人にはうんざりしたわ。家にはちっともお金を入れないで、外で女を作って浪費三昧。もう、堪忍袋の緒が切れました。離婚して慰謝料をふんだくってやりたけれど、なかなか証拠を掴めなくて……」。

鷹場は島根の女房に、証拠をでっち上げる案を持ちかけた。

鷹場の描いた絵図——島根の決定的な不倫現場を盗撮し、慰謝料請求を優位に進めること。

本当に寝る必要はない。ラブホテルの前で鼻の下を伸ばして、沙耶を連れ込もうとする島根の馬鹿ヅラを撮れば十分だ。

この「仕事」に、鷹場は迷うことなく沙耶を指名した。幸福企画へ舞い込む復讐は、大別してふた通りに別れる。

ひとつは、対象者の家庭、または仕事を崩壊させること。ふたつ目は、対象者自身の名誉、体裁、容姿を傷つけ、恥辱と絶望を与えること。

藤木安菜や美樹という少女の場合は後者にあたり、島根の場合は前者にあたる。

鷹場はまず、依頼人の話にじつくりと耳を傾け、対象者の情報を分析し、報復法を思索する。この際に、依頼人に非があるか対象者に非があるかは関係ない。

依頼人の逆恨みだろうがなんだろうが、報酬になるならば殺人以外はなんでも引き受ける。ドブネズミは、餌の選り好みはしない。眼前に餌があれば、腐っているようがお構いなしに食らいつく。そこには、良心のかけらも道徳心の切れ端もない。

が、選り好みしないのと無鉄砲は違う。餌に殺鼠剤

は混入していないか？ 罌は仕掛けられてないか？ の、警戒は怠らない。どんなに魅力的な餌をちらつかせても、未成年、精神分裂者、ヤクザ関係者、警察関係者の依頼は絶対に受けない。

その餌に食らいついて大丈夫か否かを見極めるために、鷹場は依頼人から電話が入ったら、氏名はもちろん、自宅と職場の連絡先を必ず訊ねることにしている。この時点で口ごもる依頼人は、躊躇わずに切り捨てる。それらを訊ねる理由はふたつ。

依頼人の素性を明らかにする目的と、お前も共犯だよ、という意識を植えつける目的。

幸福企画が捕まれば、お前も捕まる——つまり、勤の鋭い対象者に問い詰められ、依頼人がゲロしないための保険だ。

もっとも、依頼人がゲロしたところで、幸福企画が叩かれる可能性は皆無に等しい。依頼を受ける電話も、こちらからかける電話も、幸福企画では、すべてトバシの携帯を使っている。

トバシの携帯——架空名義の携帯。裏ビデオの業者などがよく利用しているやつで、トバシの携帯は一般